

「”月”を探究する(1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

地球唯一の「天然衛星」“月”は、他の惑星の衛星にはない、特異な性質がある。その最大の特徴は、「惑星(地球)の大きさと比較して、異常に大きい」ということである。その大きさの比は、準惑星の冥王星を除けば、太陽系で最大である。直径は地球の約4分の1。しかし質量は81分の1しかない。それでも月は「潮汐力」という力で、地球に絶大な影響を及ぼしている。



月は古今東西を問わず、人類の生活にも大きな影響力をもたらしてきた。暦の作成、月夜の明るさ、そして鑑賞の対象としてである。写真は満月の4

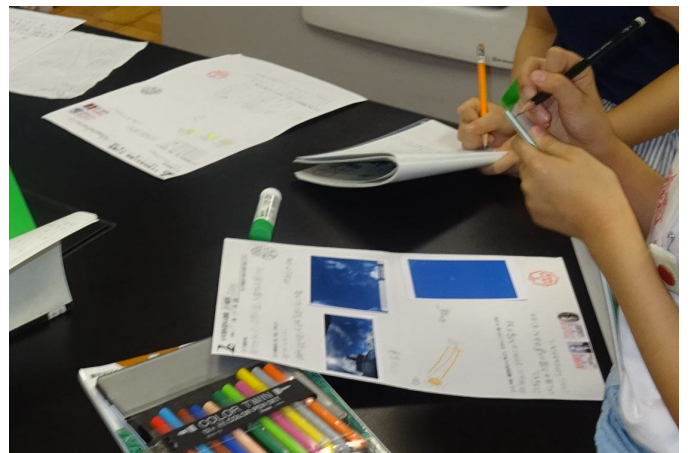
日後の月。満月を過ぎると、月は1日に約50分ずつ昇るのが遅くなる。4日目には深夜になってしまうので、「月の出を寝待とう」というわけて「寝待月」という。



月は「食」とも関連が深い。写真は、十五夜の日の給食。菜葉の汁に丸くて黄色いかまぼこが入っている。しかも白いウサギの模様がついている。デザートは月見だんごよろしく「月見みたらしだんご」実に日本の給食らしい組み合わせだ。



月は授業での観察が難しく、6年生では夏休みに、月の観察を宿題にすることが多い。休み明けの最初の理科の授業で、「月博覧会」をすることにした。



「月博覧会(月博)」は、宿題で取り組んできた月の観察プリントを「互いに見合って学ぶ」という活動だ。研究成果は、画用紙1枚に新聞のようにまとめている。それを机の上に置いて、ノートを持って見合う。



中には段ボール製の手作りの「観測機器」を紹介する子どももいた。方位磁針と分度器(高度計)がついている。ドブソニアン型の天体望遠鏡のような、簡易経緯台である。観察穴には、透明板に十字線もついていて、なかなかよく考えられている。